

転落防止・ケガ軽減に ウレタン製低床ベッド



居室に設置された「おふとんベッドⅡ」（写真右）

これまでは転落時のケガを最小限にするために、ベッド横の床にマットレスやジョイントマット等を置いていたが、柔らかすぎるため立ち上がり時のバランスがとりにくくかえって転

倒のリスクが高まり、また、厚さがあるため歩行器がベッドにつけられない等の問題もあった。転倒転落によるケガだけではなく、コード類やマスクの針金、ベッドの備品で自傷行為をすることもあり、導入する用具は慎重に検討する必要があった。看護部の太田智香子部長は「安全はとても大切だけれど、安全のための身体拘束は最少限にとどめたい。患者の安全と自由な生活を両立できる環境を整えたいと考えていた」と話す。

そこで、イノアックリビング（東京都品川区、神谷秀幸社長）が販売するウレタン製の低床ベッド「おふとんベッドⅡ」を15台導入。中央のくぼみにマットレスを入れて使用し、床からの高さはわずか17cmで転落した際のケガのリスクを最小限にする。本体は全

てウレタンでできており、体をぶつけても痛みが少ないうのが特長だ。85%が転倒・転落防止やケガの減少を評価

同病院では、看護師が中心となり全患者の転落リスクをアセスメントし、転落や器物破損リスクが高い人のほか、児童の夜間安眠などで活用している。職員向けにアンケート調査を行ったところ、約85%が転落防止などの目的に対して「効果があった」と高く評価している。

導入後はベッドからの転落を繰り返す人に使用することで、大幅なリスク軽減

太田部長は「現在では低床ベッド活用時の職員の介助負担軽減の方法を検討している。身体拘束ゼロの意識が広がるよう、今後も積極的に取り組んでいきたい」と語った。

医療法人仁精会が運営する精神科病院「三河病院」（愛知県岡崎市、徳倉達也院長）は、ウレタン製低床ベッドを活用して転落やケガのリスクを最小限にする環境を整えている。

同病院は精神一般入院病棟60床、精神療養病棟60床、児童思春期病棟30床を有し、認知症や統合失調症の高齢者のほか、行動障害、発達障害、思春期の精神障害などを抱えた児童も入院している。



太田部長（左）、小野主任

レタン製の低床ベッド「おふとんベッドⅡ」を15台導入。中央のくぼみにマットレスを入れて使用し、床からの高さはわずか17cmで転落した際のケガのリスクを最小限にする。本体は全

また、おふとんベッドⅡのカバーは防水仕様で清掃も可能。看護部の小野浩司主任は「放尿や排便、ケガによる出血でベッド上だけではなく居室全体が汚れることも多い。同製品は汚れたらすぐ清掃できるので、衛生的な空間を維持できるようになった」と評価する。

このほか、低床のため安心感が強く、職員が添い寝をして児童を寝かしつけることもある。他の子の使用している様子を見て『同じように寝たい』という児童の希望も多いという。

太田部長は「現在では低床ベッド活用時の職員の介助負担軽減の方法を検討している。身体拘束ゼロの意識が広がるよう、今後も積極的に取り組んでいきたい」と語った。